

TOPICS

- ① 大学共通の英語教育プログラムの開発（基盤教育部門）
- ② 栄養学科の授業における事前事後学習の取り組み
- ③ 自律的な学びに向けて、頑張り過ぎない、次へ備える

## 大学共通の英語教育プログラムの開発（基盤教育部門） —新カリキュラムにおける外国語（英語）必修科目の共通シラバス—

### 外国語（英語）教育の目標設定

グローバル化が進む現代社会の様々な場面において、英語の実践的運用能力の必要性がますます高まっている。高等教育研究開発センター基盤教育部門では、「大学共通の英語教育プログラムの開発」の中で、本学の外国語（英語）教育の目標を、「学士力を構成する汎用的技能の一つとしての英語コミュニケーション・スキルを育成すること」と位置づけ、卒業までの体系的な英語教育の構築を目指している。

2023年度施行の新カリキュラムにおける英語教育において、1年次の「コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ」では、英語の『聞く』『話す』『読む』『書く』を中心とした英語運用能力の基礎力及び応用力の育成を目指す。そして、2年次前期の「コミュニケーション英語Ⅲ」では、1年次の学びを途切れさせることなく引き継ぎ、英語運用時の実践力を育成する。さらに、2年次後期の選択科目「コミュニケーション英語Ⅳ」では、学部ごとに学生の将来のニーズに応じた到達目標を設定し、英語の資格・検定試験、語学留学等を目指す学生や、将来にわたり語学を学び続けたいと考える学生を、自立した学習者に導くための英語教育を提供することを想定している。

### 2021年度英語プレースメントテスト結果

2021年2月～4月、本プログラムの第一歩としてクラス分け・レベル分けに特化した「英語プレースメントテストEX（NPO法人英語運用能力評価協会：ELPA）」を新入生対象に実施した。本テストは、リスニング14問、語彙・文法24問、リーディング14問の計52問300点満点で構成され、設問は4択（一部3択）形式で、所要時間は45分である。パソコン受験（CBT）のため、学生は入学前の都合の良い時に個別に受験することができた。

全体の合計点の平均値は139.5点であった（表1）。

合計点を従属変数、学科（11学科）を要因とする一元配置分散分析を行った結果、有意確率0.1%で有意差が認められ、学科による英語力の差が明らかになった。さらに、各学科内においても得点に差が認められた（畑江，2021）。

これらの検証結果は、初年次英語教育における習熟度別クラス編成の重要性を裏付け、さらに学生の入学時の英語力を把握できたことで、シラバスの到達目標を適切に設定することが可能となった。

表1: 学科別統計量（2021/4/30現在）

学科	度数	平均値	中央値	最小値	最大値	標準偏差
社会福祉	179	132.0	129.0	51	209	28.833
実践心理	101	148.2	141.0	73	249	39.323
教育福祉	143	142.2	143.0	0	263	36.591
コミュニティ政策	65	129.9	129.0	68	191	27.649
看護	105	157.2	159.0	56	289	34.753
栄養	79	143.2	135.0	68	230	34.399
経営学科	82	128.4	123.0	65	261	29.974
観光経営学科	69	135.0	132.0	84	212	28.435
こども教育学科	110	140.7	134.5	85	266	32.656
表現学科	84	141.3	138.5	50	224	33.105
歴史学科	56	130.6	127.0	63	228	31.067
合計	1073	139.5	135.0	0	289	33.771

### 英語共通シラバス作成

「高大接続改革」の中で求められる具体的な「カリキュラムの体系化」として、（1）多様な背景を持つ学生を大学教育に円滑に移行させるための「初年次教育」の充実、（2）個々の学生の能動的な学修を促進するためのカリキュラムの工夫、（3）広く深い学修を重ねられる学修環境の整備、などが求められている（高大接続システム改革会議，2016）。本英語教育プログラム開発の中で、「習熟度別クラス編成」による初年次教育の充実、「共通シラバスの体系化」によるカリキュラムの工夫、「ICTの活用」による学修環境の整備の研究を進めた。

### (1) 習熟度別クラス編成

初年次必修科目の「コミュニケーション英語Ⅰ」、「コミュニケーション英語Ⅱ」は、前述の「英語プレイスメントテスト」を利用し習熟度別クラス編成を行う。2年次前期の「コミュニケーション英語Ⅲ」は、1年次後期12月～1月に実施する「英語アチーブメントテスト」（「英語プレイスメントテスト」と同一形式）の結果により再編成する。クラスサイズは、ペアやグループワークによるアクティブ・ラーニングに適する25名前後とし、クラスは、上級・中級・基礎の3レベルで編成する。2021年度は、このテストを使用して、社会福祉学科、実践心理学科、教育福祉学科、コミュニティ政策学科、看護学科で、先行的に習熟度別クラス編成を実施した（表2）。

表2:習熟度別クラス編成例（2021年度 社会福祉学科）

学科	科目名	区分	CEFR	最高値	最低値	履修人数
社会福祉	英語Ⅰ（基礎）WA	上級	A2	209	160	26
	英語Ⅰ（基礎）WB	上級	A2-A1	166	141	27
	英語Ⅰ（基礎）WC	中級	A1	151	132	24
	英語Ⅰ（基礎）WD	中級	A1	135	123	24
	英語Ⅰ（基礎）WE	中級	A1	124	114	24
	英語Ⅰ（基礎）WF	中級	A1	114	101	24
	英語Ⅰ（基礎）WG	基礎	A1-preA1	106	71	24
	英語Ⅰ（基礎）WH	基礎	preA1	77	51	25

### (2) 共通シラバスの体系化

2023年度施行の「コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の共通シラバスでは、「授業目的」「授業内容」「到達目標」の項目は統一した形式を用い、適宜その授業レベルに応じた表現を用いることとする。

- ・「授業目的」：新カリキュラムにおける「コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の「授業科目の概要」との整合性を保ち、英語コミュニケーション能力の習得を目的に、段階的に設定する。

- ・「授業内容」：『聞く』『話す』『読む』『書く』の4技能をバランスよく学習することを明確に示す。ペアワークやグループワークを通して英語での発信力を育成するための授業展開をする。

- ・「到達目標」：「コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の中で、教員及び学生が、「この授業で何ができるようになるのか」を理解して授業に臨めるように、「淑徳大学学士カールブリック」（淑徳大学, 2021）及びCEFR（注）の「共通参照レベル：自己評価表」（吉島茂・大橋理枝（他）（訳編）, 2008）を参考に作成した「淑徳大学外国語（英語）Can-Doリスト」（表3）を用いる。

### (3) ICTの活用

語学学習に欠かせないツールとして視聴覚教材が挙げられる。授業内外でいかに本物の英語に触れ実際に使用する機会を得ることができるのかが重要となる。初年次の「コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ」では、高校英語の語彙、表現、文法事項の復習を交えつつ、シラバスの「授業目的」で明示される「英語コミュニケーション能力の習得」から逸脱しないような配慮が必要である。そのために、リスニング及びスピーキン

グ指導に効果的なデジタル副教材の充実したテキストを採用することとする。また、それらにはオンラインによる自学自習が可能なコンテンツも含まれており、学生の事前・事後学習に有効であると期待される。

表3:淑徳大学外国語（英語）Can-Doリスト  
（参考資料：吉島茂・大橋理枝（他）（訳編）, 2008）

レベル (CEFR)	各科目別			英検				
	英語Ⅰ	英語Ⅱ	英語Ⅲ	聞くこと	読むこと	話すこと (やり取り)	書くこと	
5 [C1]			上級	特別の努力なしにテレビ番組や映画を理解できる。	長い複雑な事実に基づくテキストや文学テキストを、文体の違いを確認しながら理解できる。	自分の考えや意見を正確に表現でき、他の話し手の発言に合わせる事ができる。	複雑な話題を詳しく論じ、一定の観点を展開しながら適切な結論でまとめることができる。	重要な点や要点を強調しながら、手紙やエッセイ、レポートで複雑な主題を扱うことができる。
4 [B2]			中級	話題がある程度身近な範囲であれば、議論の流れが概観できても理解できる。	筆者の姿勢や視点が現れる現代の問題についての記事や報告が読める。	流暢に自然に会話をする事ができ、母語話者と普通にやり取りができる。	興味関心のある分野に関連する限り、幅広い話題について明確で詳細な説明をすることができる。	興味関心のある分野なら、いろいろな話題について明確で詳細な説明を書くことができる。
3 [B1]			基礎	身近な話題について、明確な要点的な話し方の会話から要点を理解することができ、	よく使われる日常会話や自分の仕事関連の言葉で書かれたテキストなら理解できる。	日常生活に直接関係のあることや個人的な関心事について、準備なしで会話に入ることができる。	得意や対面に対する理由や説明を簡潔に示すことができる。	身近で個人的に関心のある話題について、つながりのあるテキストを書くことができる。
2 [A2]			基礎	短い、はっきりとした簡単なメッセージやアナウンスの要点を聞き取れる。	ごく短い簡単なテキストなら理解でき、日常の簡単な情報を取り出せる。	日常生活で身近な話題や活動について話し合いができる。	自分、家族、周囲の人々に関する内容を、一連の語句や文を使って説明できる。	簡単な簡単な短メモやメッセージを書くことができる。
1 [A1]			基礎	はっきりとゆっくりと話し込まれれば、聞き取れた語彙やごく基本的な表現を聞き取れる。	掲示やポスター、カタログの中よく知っている言葉やごく基本的な表現を聞き取れる。	簡単な必要なことやごく身近な話題についての簡単な質問なら、聞いたり答たりできる。	自分の身の周りのことについて、簡単な語句や文を使って説明できる。	たとえばホテルの宿帳に名前、国籍や住所といった個人データの書き込みを行うことができる。

### 今後の課題

習熟度別クラス編成では、上位クラスと下位クラスの成績で「逆転現象」が起こり得るため、標準化得点による成績評価を行い、公平性を維持する基準を設定する必要がある。評価のばらつきを是正するため、プレイスメントテスト及びアチーブメントテストをクラスの基準点とし、各教員が個別に出した点数を相対評価に変換する等、成績評価の公平性はカリキュラムによって保証されなければならない。

さらに2年次は、実践的英語能力の向上を目標に、制限を設けない英語教育、つまり個別対応の可能なラーニングとの併用（ブレンディッド・ラーニング）も視野に入れて研究を進めたい。

（高等教育研究開発センター 畑江美佳）

（注）CEFR：“Common European Framework of Reference for Languages”の略で、欧州評議会（Council of Europe）が示す、外国語の学習や教授等のための「ヨーロッパ共通参照枠」を言う。CEFR指標はA1からC2の6段階であるが、日本では独自のCEFR-Jを構築し、A1レベルの前に入門段階のpre-A1を新設した。文部科学省はこのCEFR指標を参考に、小・中・高等学校を通じた5つの領域（「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やり取り・発表）」「書くこと」）別の目標を設定した（文部科学省, 2017）。

### 引用文献

高大接続システム改革会議（2016）「高大接続システム改革会議「最終報告」」  
 淑徳大学（2021）『7.学修成果のリフレクション（振り返り）について』「2021年度履修の手引き」  
 畑江美佳（2021）『淑徳大学「大学共通の英語教育プログラムの開発」における外国語教育の目標設定及び入学生の英語力調査』「淑徳大学高等教育研究開発センター年報第8号」淑徳大学高等教育研究開発センター（2021年11月発行予定）  
 文部科学省（2017）『新学習指導要領における外国語（英語）教育について』「一般財団法人日本私学教育研究所主催大学入試における外国語（英語）検定試験活用に関する緊急説明会資料」  
 吉島茂、大橋理枝（他）（訳編）（2008）「外国語教育Ⅱ－外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠－」朝日出版社初版第二刷

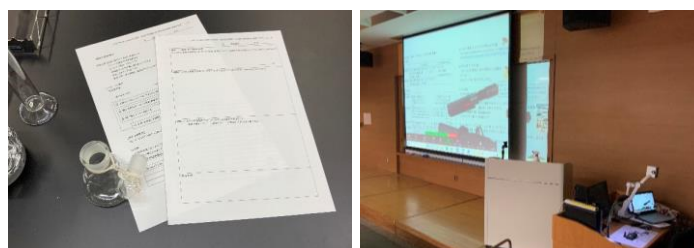
## 栄養学科の授業における事前事後学習の取り組み

担当している授業の事前事後学習に関する取り組み事例をご紹介します。

食品化学実験Ⅰ・Ⅱでは、レポート課題に当日行った実験の復習課題とともに「次回の実験に向けての予習課題」を加えるようにしています。実験に関する質問で多く上がる「考察に何を書けばよいのかわからない」という疑問に対して、事前学習で当日行う実験に関する課題に取り組むことで予備知識を入れてもらい、授業の最初に実験結果の仮説を班で話し合ったり、実験後の結果をもとに考察を班で話し合ってもらうようにしています。また、事前学習で実験の予備知識を学習してもらっていることで、授業時間を説明はできるだけ短く、学生が行う実験操作は長くとれるように工夫しています。特に、食品化学実験Ⅰは、栄養学科の学生が実験器具を扱う最初の授業に当たり、実験器具を実際に扱い、操作に慣れる時間を必要とします。高等学校で化学を選択していない、選択はしていたが実験はなく、器具の名前は分かるが扱ったことがないという学生もいるので、事前学習で実験器具の扱い方を調べてきてもらい、授業時間は器具を扱う時間を多くとるようにしています。

講義科目の食品化学Ⅰ・Ⅱでは、毎回プリントを配布し、そのプリントにシラバスに記載していた事後課題と次回の事前課題を提示するようにしています。また、事後学習の一部として毎回、今回の授業の中から穴埋め問題を1つ作成してもらうようにしています。これは、以前アクティブラーニングに関する研修会で講師が紹介された方法になります。学生によって作成される問題が授業の前半や後半の内容に偏る傾向があるように感じる時もありますが、学生なりに授業を振り返るきっかけ作りとしています。また、試験問題を作成する際に活用すること初回の授業で伝えているので、学生なりに重要だと感じた内容を記述してくることもあるので、そこから授業でポイントが伝わったのか教員側の確認になったりもします。穴埋め問題の作成

は、新型コロナウイルス感染症が発生する以前は、配布プリントに記入し、チェックするようにはしていましたが、現在はGoogleフォームに入力してもらう形式に変更し、類似問題のチェックがスムーズになりました。また、問題作成以外に、授業を振り返るための簡単な選択問題を数問入れて事後学習を促しています。事後学習に関しては、次の授業の前日に学習した内容に関する国家試験の過去問などをGoogleフォームで作成し、復習をしているか確認するように促しています。今後は、過去問のGoogleフォームに事前学習を促す要素を加えていきたいと思えます。



今学期は、新型コロナウイルス感染症対策として食品化学Ⅱの授業が、一部対面、一部Zoom（ライブ）、一部はZoom（ライブ）を録画したものを視聴するオンデマンド型の3種類のハイブリット型の授業になっています。3種類の対応について、出来るのか不安だったり、録画したものをPanoptoにアップして、クラスルームにリンクをつけるなど授業以外の作業が増えていますが、録画を残している所以对面、Zoom（ライブ）で出席した学生にも事後学習や試験前の復習で活用してもらえるかもしれない、学生が学ぶ機会が増えるならよいかと考えるようになりました。新型コロナウイルス感染症に関する対応で、やったことがないので不安だと感じていたICT活用でしたが、試行錯誤しながら事前事後学習にも活用できるようになりました。今後もICTを上手に活用しつつ、学生が興味関心を持って学習できるように授業を工夫していきたいと思えます。

（看護栄養学部栄養学科 准教授 伊澤華子）



## 自律的な学びに向けて、頑張り過ぎない、次へ備える

### ●はじめに ～「次に活かす」ことができたのか～

昨年度に発行されたNEWS LETTER 2020 Vol.2において拙稿（「学びを止めない、無理はしない、次に活かす」）を寄せる機会を得た。改めて読み返すと、2020年度は「激動の年」と振り返っていたが、1年経過した現在においても、新型コロナウイルス感染症による影響は続いており、学部の教務担当者として、円滑な教学運営に向けて日々腐心しているところである（コロナ禍収束後、教務担当者（筆者）による諸対応への検証等は、「次に活かす」観点でも必要であろう）。

先の拙稿のタイトルに「次に活かす」と明記したことを今になって反省しているが、本稿では、筆者の担当科目「労働法」（後学期）（以下、「本科目」という）を引き続き取り上げて、昨年度の本科目の授業展開に係る振り返り（反省）を行うとともに、今年度において「次に活かす」ことができたのか、遠隔授業においても学生と「つながり」を感じられる授業展開ができていかなど、筆者の管見の及ぶ範囲で述べてみたい。

### ●学生から示唆を受ける ～昨年度における本科目の授業展開の振り返り～

昨年度の本科目の授業形態は、新型コロナウイルス感染症の影響によって全回にわたり遠隔授業形態であった。本科目の授業展開の流れとしては、シラバス記載の事前（事後）学習内容の確認に始まり、前回講義の復習、授業資料や参考資料等に基づく学修、オンデマンド配信動画（15分～30分程度のポイント動画）の確認、質疑応答（LINEオープンチャットあるいはメール）、授業課題の解答、解説（フィードバック）といった流れであった。

当時の筆者は、いわばユーチューバーになりきり、拙宅の納戸をスタジオと称して慣れないオンデマンド動画を収録していた。再生回数が少ないユーチューバーの悲哀をリアルに感じていたといえる。同時双方型の授業形態ではなかったため、質疑応答にLINEオープンチャットを導入して双方向性を確保したとはいえ、学

生からの投稿は少なく（リピーターに限られていた）、結果として筆者の自問自答に終始していた。

本科目全15回が終了した後、本科目に関して独自にアンケートを恐る恐る実施したところ、①全体の約25%の学生がスマートフォンを使用して受講していたこと（親指でレポート作成や小テストを受験していたのか・・・）、②学生にとっては、授業内容の理解よりも、とにかく課題を提出（＝出席とみなされる）することが主要な目的となっていたこと、③LINEオープンチャットは他の学生の目が気になって質問しづらいこと（メールのほうが質問しやすい）、④遠隔授業を受講することによって疲れやすくなっていること（筆者も同様・・・）、⑤筆者のオンデマンド動画はまったくエモくなく、かつ、バズってもいないこと（これは自認している）など、学生から数多くの授業展開のヒントをもらうことができたと思う。

### ●できる範囲で、学生とつながる、学生をつなげる ～今年度における本科目の授業展開～

今年度の千葉キャンパスにおける授業方針では、原則として、演習・実験・実習科目は、感染予防対策を徹底した上、対面授業形態により実施されることとなり、その他の講義科目は、教室内の換気量算定結果や各科目の特性等を踏まえ、対面授業形態、遠隔授業形態（動画プラットフォーム「Panopto」による動画配信）、ハイブリッド型授業形態（対面授業と遠隔授業とを併用）それぞれの形態により実施されることとなった。

本科目については、対面授業形態による実施を予定していたものの、8月には4度目の緊急事態宣言の発出や新型コロナウイルス感染者急増等の影響を受けて、9月中（第1回から第3回講義まで）は遠隔授業形態へ変更を余儀なくされた。今年度の本科目の受講者数は35名（4学科）と例年より少なかったため（昨年度の受講者数は55名）、感染予防を徹底しながら、判例を用いたケースメソッドによるグループディスカッションやゲスト講師（弁護士）による労働審判手続申立書の起案体験などを予定してい

たが、上述の通り、9月中はそうした双方向性のある講義方法も変更せざるを得なくなった。

9月中の第1回～第3回講義では、昨年度の授業の進め方を踏襲しつつも、先述の学生からのありがたいヒントを活かして、できる限り改善を図った。今年度より千葉キャンパスで導入された「Panopto」は、各学生の視聴日時等の視聴履歴に係るデータを入手できることから、誰がどの程度視聴したかを確認することができる（視聴完了をもって出席とみなされる）。また、「Panopto」にはディスカッション機能（使いこなせていないが・・・）やクイズ問題の挿入機能などが付帯されている。したがって、例えば、学生が居眠りをすることなく、動画を視聴しているかどうかを確認するために、各パートにクイズ問題を差し入れ、クイズに正解するまで動画を進めることができないように工夫している。こうしたクイズ問題を出题することによって、授業内容の理解度を適宜確認するとともに、履修状況（出欠席）の確認を行っている。昨年度の反省点である「課題提出ありき」の傾向を改善し、動画内のクイズ問題の差し入れに代え、各回において提出を求めた課題はやや控えるようにした。

また、質疑応答において用いていたLINEオープンチャットの活用方法を変更した。昨年度は、あくまで質疑応答や各種連絡のツールに留まっていたが、開講時限中にディスカッションを行うためのツールとして活用することにした。例えば、「内定者に対するSNS調査の是非」や「在宅勤務（テレワーク）の弊害」等、本科目で取り扱う労働法学とアクチュアルな問題を絡ませながら、授業内容を踏まえてディスカッションしやすいテーマをもとに問いかけるようにした。当初は、筆者の問いかけばかりの投稿が並んでしまい、まさに自問自答の状態に陥り、寂しいマッチポンプ的な場面が続いたが、「今日の授業動画、ちょっとダジャレ入れてみたんだけど、受けてた？」などと気楽な雰囲気を作出したことにより、次第に学生からの投稿も増えていったように思われる。「各回1人1投稿」といったルール化では、活発で自由なディスカッションは期待できないため、「強制」ではなく「共生」の観点で、あくまで「任意」であることを心がけた。教員と学生間のつ

ながりはもとより、学生同士のつながりも垣間見えてきたといえ、やわらかなコーディネーター役の必要性を切に感じる。

10月以降（第4回講義以降）は、ようやく対面授業形態に戻り、真に「顔が見える」関係になったと思われる。しかし、コロナ禍前の対面授業を行うのでは芸がない。そこで、コロナ禍によって加速した遠隔授業形態のノウハウを活かした対面授業を進めている。今なお、試行錯誤、そして、暗中模索の最中ではあるが、過去に撮りためた拙いユーチューバー動画（昨年度の本科目に係るオンデマンド動画）をもとにした反転学習（授業）を行うなどして、多くの授業時間をケースメソッドによるディスカッションや双方向性を意識した実践的な学びへ充てることができ、「教える」ことと、「学ぶ」ことの基軸を大きく転換することも可能となっているように思える。



図1:本科目のオンデマンド動画配信（授業内容）の一例



図2:本科目のオンデマンド動画配信（クイズ）の一例

(次ページへ続く)





図3:本科目のLINEオープンチャットでの質疑の一例

## ●激動の時代を見据え、次へ備える ～授業形態のパラダイムシフト～

以上、昨年度と今年度の本科目における授業展開について、「一人FD」の如く、振り返ってみた。本科目は、（現在あるいは将来の）「労働者」としての学生にとって、単なる法的知識の習得に留まらず、法的なもの（リーガルマインド）を得る上でも重要な役割を担っているといえる。労働紛争に関わらず、日常生活上において生起する法的紛争に遭遇しないように、未然に予防する力、また、仮に法的紛争に遭遇した場合、事後的であっても解決に導くことができる力（どの機関に相談することが適切か判断できる力を含む）を得ることが肝要であろうと思われる。パンデミックを含めた予測困難な時世において、労働者として自律的に学び続ける姿勢を身につけることは、単位修得以上に重要なスキルであろうと思われる。

そのために、この2年が「激動の年」であったからこそ得られたノウハウを活かし、できる範囲で、学生が自ら、学ぼうとする意欲を喚起させ、学び続けられるよう、頑張り過ぎず、次なる授業展開を試みたいと思う。教育のDXやICT活用等、大学教育のデジタル化が進展する中、学修者本位の教育への転換や、さらなる授業の質の確保・向上に向けて、教育プログラム自体もしなやかに変容していかなければならないと思われる。大学を取り巻く厳しい環境を踏まえ、「激動の年」で培ったノウハウを活かしつつ、18歳人口減少を見据えて、来るべき「激動する時代」に備えることが急務であると改めて感じている。

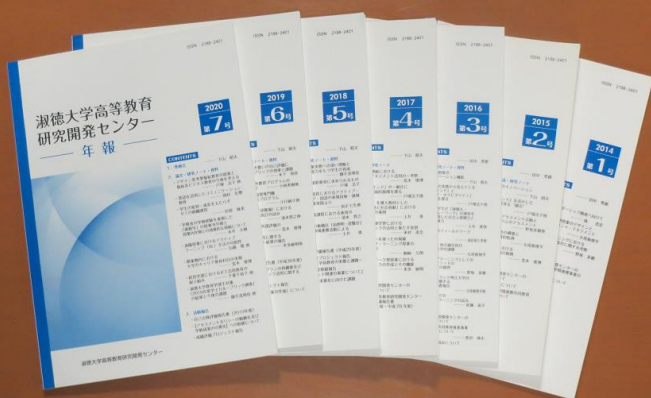
（コミュニティ政策学部コミュニティ政策学科准教授 日野勝吾）

## センター年報第8号について

淑徳大学高等教育研究開発センターは、本学の教育研究の改革・改善に関する事項を取り扱い、本学の教育の発展・向上に資することを目的として、平成25年4月に設立されました。

昨年度から基盤教育部門が設置され、今回の記事でも紹介されていた通り、全学共通の英語教育プログラム作成を目指して取組が進んでおります。また、教育開発部門においては、成績評価に関する調査研究の取組が進んでおり、年度末に活動報告も含めたFDを実施する予定です。

さて、このような活動を展開している高等教育研究開発センターですが、この度「淑徳大学高等教育研究開発センター年報第8号」を発行いたします。今回は計14件（うち、2件取り下げ）の申し込みがあり、取り下げ分を除いた投稿種別の内訳は、論文：5、研究ノート：6、資料：1となりました。執筆者の皆様、ご投稿誠にありがとうございました。



第7号に引き続き、今回も多くのキャンパス・学部から投稿いただいております。様々な分野の研究成果が年報へ掲載される予定です。現在、編集委員会において鋭意編集を行っております。年報第8号は11月中旬～下旬に発行する予定です。発行まで今しばらくお待ちください。

また、教職員の皆様におかれましては、来年度のご投稿をお待ちしております。年報第9号の募集概要につきましては、来年6月頃を目途に公表予定です。

淑徳大学 高等教育研究開発センター NEWS LETTER 2021 第2号  
発行日：2021年10月31日  
編集：淑徳大学高等教育研究開発センター  
TEL：043-265-7331 FAX：043-265-8310  
E-mail：kaiatsu@soc.shukutoku.ac.jp